

書 評

神立春樹・葛西大和著

『綿工業都市の成立』

——今治綿工業発展の歴史地理的条件——』

専修大学教授 加 藤 幸 三 郎

I

周知の「資本主義論争」をひきつぐ形で戦時体制の末期から、いわゆる「戦後変革」期にかけて、「マニュ論争」が再燃した。

それは一面で戦後歴史学における二大論争の一つといわれた「地主制論争」へとつらなってゆくのであるが、他面で、幕藩体制解体過程における「雇傭労働」の性格規定をめぐる、泉南・尾西・桐生・足利各地方における綿・絹織物業の実証的研究の進展ともかわる論争もそれをうけて展開されてきたといつてよい。<sup>(1)</sup>

この小論で、なにがしかの検討を試みようとする『本書』の共著者たる神立氏は、おそらく上述の問題意識をふまえ、特に「地主制論争」を十二分に意識され乍ら、明治期を中心とする農村織物業の展開の諸相をば、埼玉南部および北陸地方を対象に実証的の把握を試みられ、その成果を公にされたのが、1974年のことであった。<sup>(2)</sup>

若干の補足を記すことが許されるならば、評者も、1960年代の後半に、後進国たる日本資本主義の成立過程で、主要な役割を演じた綿糸紡績業の実証的研究を志してきたのであるが、<sup>(3)</sup>巨大紡績資本（就中、いわゆる「六大紡」）に体现される、「綿糸紡績業」の構造的特質ならびにそれと相関連する「兼営織布業」に重点をおき、いわば「地方織物業」をも遠望していたといえよう。

しかし乍ら、評者のみるところ、周知のように「地主制論争」は、1950年代後半に至るも（洋の東西に通ずる）いわば「比較経済史学」としての論争（＝対立）点を止揚えぬままに、停滞・終焉せしめざるをえなかったのである。

そして、むしろ1960年の国民的課題であった、ともいえる「安保反対斗争」の体験をふまえて、経済史学における集中的論点は、「市民革命」期から、「産業資本成立期」へと移行してゆく。<sup>(4)</sup>したがって、神立氏の前著にしる、評者たちの共著にしる「地主制」（＝土地所有）の側面よりも、「資本」の側面からの接近に力点がおかれていたものといえよう。

ところで、戦後、日本資本主義の展開、就中「高度成長期」を経過した後の、具体的には、昭和40年代以降のいわゆる「低成長」（あるいは「スタグフレーション」）に表現されている戦後日本資本主義における「一般的危機」の段階的深化、そして、「中央集中」に対する「地域」産業の再生・復興……、かゝる危機的な問題状況の中で、神立・葛西両氏の力作たる本書が刊行されてきているように思われる。

#### 註

- (1) や、古いが、拙稿「近代史研究解説——経済」（旧『岩波講座 日本歴史』17〔岩波書店、1962年〕）参照。
- (2) 神立春樹『明治期農村織物業の展開』（東大出版会、1974年）。
- (3) 梶西光速編著『繊維 上』（『現代日本産業発達史』Ⅳ〔交詢社出版局、1964年〕）参照。
- (4) 吉岡昭彦「日本における西洋史研究について—安保闘争のなかで研究者の課題を考える—」（『歴史評論』121号 1960年7月）。

## Ⅱ

さて日本経済史を専門領域とされる神立春樹氏と、人文地理学を専門領域とされる葛西大和氏とのすぐれた共同成果ともいべき本書は、つぎのような構成を示している。

#### 序 論

- 第1章 今治綿織物業史における論点
- 第2章 今治綿織物業の発展過程
- 第3章 綿織物工場の設立事情

第4章 今治綿工業成立の基盤

第5章 今治綿工業都市の成立

以下、順をおって、各章の概要を紹介しておこう。

序論では、そもそも「四国のマンチェスター」ともいうべき、代表的な地方工業都市今治を対象に、明治・大正期の綿ネル業の発展過程を検討されようとしたのが本書であり、神立氏が一昨年求められて『山陽新聞』に寄稿された一文を、まず掲げられている。「工業化についての一視点」なる文章がそれであって、いわゆる「高度成長経済」の矛盾の帰結ともいうべき「今日の瀬戸内地方」での「深刻な公害問題や地域住民の生活にかかわる諸問題が解決されるべき課題として提起されてきている」現状をふまえて、これが解決には「近代工業の自然や地域の経済構造」との関連性の認識についての必要性を指摘される（1頁。以下、本書でのページ数のみ略記する）。後進資本主義国として出発した本邦近代工業の場合「いわゆる上からの育成によって、こういうこととのかかわりあいなしに成立してきたかのごとき観を呈している」（1頁）点こそが、大きな誤りであろう、と。

したがって、かゝる視点に立って、今治綿工業（特に綿ネル業）の発展過程を振り返ってみると、いくつかの興味深い論点が浮び上ってくる。そもそも今治の綿ネル生産は明治19年に和歌山から移植されたのであるが、「和歌山のそれが機械捺染に転換した明治30年代に、それら是对照的な特異なものとなってくる」（2頁）。「技術的には先晒・先染であり、生産形態としては、越智郡一円にわたる広範な地域での小マニュファクチュア形態をとり、和歌山の後晒、機械織布、機械起毛、機械捺染と著しく異なる」（2頁）。さらに「先晒・先染についていえば、蒼社川の水質が適することによって純白な製品がづくり出せるという」「水質と水量に由来し」、それをふまえて「織り込みネルの手機」生産が展開する（2頁）。しかも、「織布を行う小機業場は、小作料収入だけでは存立し得ない小地主層によって設立され、今治の綿ネル業者＝本工場によってその分工場として編制された」（2頁）のである。

いわば、タオル生産の原型ともいうべき、今治綿ネル業の発展には、一方では「漂白に適した蒼社川の豊富な水という自然条件」（2頁）と他方では「小地主層が卓越する西日本の小地主地帯という農業＝農村構造の特質」（2頁）との両条件が必要とされ「明治40年代に力織機が広く普及しはじめ、分工場の廃止、機械制工場生産へと発展してゆく」（2頁）。

つまり、歴史研究者としての立場から、「地域開発の進行過程で大きな問題として顕在化してきた工業開発と地域経済との関連、ならびに工業存立と自然条件とのかかわりあい、本来は近代工業の成立過程における重要な検討課題」（4頁）だったことを確認され、イギリスにおける「近代工業の成立・発展過程の研究」（4頁）と日本における場合との差異を指摘される。いってみれば、後進国的な、「上から」の資本主義の育成という歴史的特質から、これまで「近代工業成立の諸条件としての自然的＝地理的条件や地域の社会的経済的事情をもあわせ検討するという視角も、また明確に設定されることがな」（5頁）かったことを繰返し指摘されている。

ついで、第1章では、農商務省『明治45年主要工業概覧』および明治38年から始まる「織物指定特別調査」によりつ、今治綿織物業の歴史的な性格規定を試みられ、「和歌山の綿ネル業を代表するものは、この紡績兼営織布依存の、機械起毛・機械捺染による機械制綿ネル業」（13頁）であったのに対し、今治は和歌山よりおくれ、多数の小工場による「先晒・先染の片毛綾ネル・織込ネル生産技術を確立」（14頁）したのである。

これをうけて、従来の研究史整理を試みられ、戦後の愛媛大学篠崎勝氏の業績に先立つものは、その多くが「沿革史的なもの」（16頁）であった、と断定される。そして、篠崎氏の研究成果の検討を通じて、研究の現況を示されてゆく。すなわち、篠崎氏は今治綿業史に関する文献の検討から「従来の沿革史や研究に共通した欠陥」（16頁）として、今治綿業における「歴史的発展過程が十分明らかにされていないことと、それぞれの発展段階における生産者＝労働者に関する考察」（17頁）が欠如していることを指摘される。「天保年間に成立した綿替制による資本家的家内労働は明治10年末まで存続」（17頁）したとし、明治19年の興修舎の創立、同22年の伊予白木綿株式会社の創立・今治工場の設置でマニュ段階へ推転したとされ、力織機導入のはじまった明治33年以降明治末年までを産業革命期とされている。しかも、これら諸段階画定の前提には、「軍官需要、海外輸出という市場条件」（19頁）が必須だったことにも言及され、今治綿商人資本のマニュ資本転化と並んで、越智郡下一円の「窮乏な小農民の広汎な存在にその労働力的条件をもとめられ」（19頁）ていたのである。

このような戦後における篠崎氏の新しい把握に対して、著者たちは大略つぎのような疑義を提される。

第1点は、「明治33年からの産業革命期」（20頁）に、一方では、動力起毛機導入・力

織機採用というように機械制工場生産への転換が始まっていると「同時に広汎に小機業場が簇生していること」(20頁)に着目すべきである。「篠崎氏によってその意義が強調されている阿部合名会社等の有力綿ネル業者における原動機の採用・力織機の導入」(23頁)にしても、それは「一部少数の有力綿ネル業者においてのみ進行しているのであって、これを除外すれば、むしろ小手工制機業場の増加こそ」(23頁)この時期の顕著な現象であり、多数の小「工場」の整理は大正2、3年にかけてであり、この時期を「単純にマニファクチュアの整理過程」(同頁)とするのは正しくない、と。

第2点は、かゝる小「工場」は、実は多くが「分工場」であった。これこそが、今治綿ネル業を特徴づけるものなのである。

第3点では、しかもこの「分工場」を詳細に検討すれば、「その多くは越智郡下一円の農村部に簇生していること」(24頁)が判明する。

かくて、明治33年の有力綿ネル業者による動力化の導入、又さらに工場制工業への転換は、明治後期・大正初期への基本的動向である点は、疑いをいれぬとしても、前述の「分工場」の広汎な簇生を確認していないとするならば、今治綿ネル業についての時期区分なり、発展過程の特質把握も亦正鵠を射ていないものとなろう。したがって、つぎのように、3つの検討課題が設定されることとなる。

第1は、今治綿ネル工業成立の基本条件としての、「分工場」形式によって展開した今治綿ネル業における生産形態の推移をあきらかにすること。

第2は、「先晒・先染のネル」をば、製品の特質とする今治綿ネル業において、「この水＝自然条件がその生産工程とどのようにかかわってきたか」(30頁)を検討すること。

第3は、「伊予の大阪」、「四国の大阪」、「四国のマンチェスター」にもなぞらえられる「今治綿工業都市の成立過程」(30頁)を検討すること、以上である。

かくて、第2章では、「今治綿織物業の発展過程」を検討される。第1節で、県下織物業の地域的構成を検討され、生産数・種類別生産の地域性・郡市別生産形態につき、統計資料を丹念に渉猟されて、前記のように越智郡に注目されてゆく。さらに、生産額推移を通して、綿ネル生産における工場制生産の展開と、逆にこれと対照的な小巾綿布＝白木綿の衰退化を確認される。これをうけて、明治33年の阿部合名会社におけるイギリス・ブラット社からの力織機の導入とその後の普及、さらにほゞ同時の起毛機導入とそれを契機とする多数の「分工場」の支配・把握への傾向を指摘される。又同時に市場条件としては軍

需に大きく依存してきたのも事実であるが、大正期には、広巾綿布とともに、対アジア市場への輸出を増大させてゆくのである。これと関連させて「工場形態の推移」をみれば、大正期に入って「分工場」は決定的に減少し、逆に綿ネル工場の多くは今治・日吉地区へと集中をみせてゆくのである。

さらに、第2節では、県統計書を始めとする統計資料を駆使されつつ、まず明治33年の起毛機械導入迄の今治綿ネル業の展開過程を概観される。そして、「起毛工程の機械化」(65頁)を契機に、越智郡下一円 of 農村部における小機業場＝「分工場」の簇生が始まる。そして大正期に向けて今治綿ネル業の機械制生産の転換が始まってゆくこととなる。この具体的動向を、明治34年以降、大正9年迄、大略5年前後の時点に従って工場の「町村別」所有状況を検討されてゆく。さらに主要綿ネル業者の実態把握も併せ試みられながら、第1類型＝「動力起毛機を設備した有力綿ネル業者」、第2類型＝「動力起毛機を有しない中小」綿ネル業者、第3類型＝(上記2類型に)「掌握された綿ネル分工場＝小機業場を有する機業家」(ともに、103頁)の存在を指摘される。これをうけて、前述の篠崎批判をふまえて、3つの今治綿ネル業発展段階を設定される。すなわち、第1段階(明治19～33年)今治綿商人による綿ネル(マニュ)の成立と越智郡下の「分工場」設立。第2段階(明治33～40年)動力起毛機の導入を起点に、農村部の小機業場(マニュ)が本工場によって分工場的に編制されてゆく。第3段階(明治40年代～大正期)は「分工場」が整理されて、大規模工場による工場制生産が確立する。

第3章では、これをうけて、綿ネル機業場設立の条件、さらには城南織物工場の設立事情を、数少ない具体的資料の検討を通じて再構成されてゆく。

さて、第4章以下では、今治綿工業成立のいわば「自然的基礎」ともいうべき、蒼社川の地理的条件の検討を通じて、水利用の社会的関係を明らかにされる。同時に、愛媛県、ひいては越智郡の農業・農村構造の特質を吟味すべく、地主制の動向を検討され乍ら、越智郡が「中小地主の卓越する地方」であり、一面で「機業労働に従事する豊富な余剰労働力」が存在することと他面で「土地収入のみでは安定的な存立が容易でない中小地主層の広汎な存在」(以上、164頁)を指摘されてゆくのである。そして、さらに越智郡下の地主制の具体的検討を通じて、「綿ネル生産を開始した層の多くは、2町前後の耕地を所有する小地主層を中心」とした点を推定され、他面で「零細農家の婦女子が機業労働力となった」(ともに、176頁)ことを指摘されている。以後、大正期にかけて、今治綿ネル業にお

ける工場制度の確立、あるいは寄宿舎制度の採用が、地主—小作関係における、「小作料の低減」ないしは「小作者減少」の一因ともなった点を指摘されている。

かくて、いよいよ最後の第5章では、「今治綿工業都市の成立」について論及されてゆく。繰返し指摘されたように、「今治綿ネル業が機械制生産への転換をつよめてゆく過程で、織物工場が今治・日吉地区へ集中」（182～183頁）していった。そこでの人口増加の趨勢も、越智郡下の最高を示し、県都松山市をも凌いでゆく傾向を示す。そして、かゝる「日吉村の都市化は、広汎な都市の雑業層の形成をともな」（191頁）い、反動恐慌の開始直前の大正9年2月に、今治町と日吉村が合併して今治市となるのである。特に「繊維工業に特化した今治は」「生産財生産部門を中心として発展した近代都市とは対照的に、消費財生産部門の発展によって形成された近代地方工業都市の一典型である」（195頁）と指摘されてゆく。そして「機業労働者および都市雑業層の増加と集中をもたらした」今治の都市住民構成をば、「県税戸数割表」の具体的かつ実証的検討を通じて論証されているのである。

### III

以上、評者の蕪雑な紹介が、すぐれた本書の内容を傷つけざることを冀求するものであるが、以下、若干の疑問点を提出させていたゞきたいと思う。

第1は、本書の副題にも掲げられている「歴史地理的条件」の検討についてである。もちろん、評者は、歴史地理学、人文地理学については全く門外漢である。只、本書の（執筆分担は明記されていないが）第4章および第5章における「自然的基礎」についての指摘は、必ずしも「全く新しいもの」とはいえまい。評者の思いつくまゝに、たとえば小千谷を中心とする明石縮の場合であるとか、広く綿糸紡績業の工場立地が多くの場合、舟運を十分に考慮して河川に接した地域に求められているとか……が想起される。又つとに、地主制史研究を主導された古島敏雄氏の諸実績を検討されるなら、明白であろう。西洋経済史の研究に疎い評者の、極めて雑白な印象でも、イギリス特にランカシャーの「運河」は、「古典的産業革命」の所産と考えられる。問題は、蒼社川系の「水」の社会的機能とどうか「先晒・先染」と関連する歴史的な究明ではなかったか。地主＝綿ネル業者だから、泉川の水利用は全く自由である、と断定できるであろうか。

第2に、戦後における篠崎氏の研究成果の批判的検討を通じて、本書では「3つの検討課題」を設定されてゆくのである（おそらく、この点が同時に、今治綿ネル業者の「類型」設定なり、今治綿ネル業の新しい発展段階の画定なりに帰結するのであろう）が、資本＝

賃労働関係の分析、換言するなら「蓄積基盤」の分析を後退させてはいかなかったであろうか。もちろん、評者のみどころ「個別経営資料」の残存は乏しいかと考えられるし、統計的には「地主制」の側面からの分析は十分に試みられてはいる。だが何としても、「綿ネル機業場」（同時に本工場と分工場との構造的関連性の究明）の「再生産のメカニズム」の解明を待望したいと考えるのは、独り評者のみであろうか。産業金融史的接近も、個別地主（就中、中小地主）経営からの接近も、「県税戸数割」の歴史的検討も、残されていると考えるのは誤りであろうか。

第3に、「四国のマンチェスター」としての今治を、「近代都市」とは峻別された「近代地方工業都市の一典型」として指摘されるなら、問題は2つの方向に向って提出されてゆくかと考える。ひとつは、「近代都市」と「近代地方工業都市」との関連性である。少くとも、「生産手段としての力織機」購入の関連は如何。もうひとつは、戦前日本資本主義の確立過程で主要な位置を占め続けた「近代的綿糸紡績業」との構造的関連性についてである。「分工場」を消滅させつゝ、大正期に入って「工場制生産」に比重を移してゆくと指摘される場合、両者、すなわち本邦綿糸紡績業と今治綿ネル業との関連性の究明こそが、真の近代的「地方工業都市」の性格把握につながるのではあるまいか。

評者も、本邦綿糸紡績業の形成・展開、就中大阪紡績の創業事情を究明したく、たまたま数年前、ランカシャー綿業地帯を歩き廻り始めたとき、現在における（日本流に言えば、「過疎」的状況にも相当する）、周知の「精紡機」メーカー＝プラット社のあったオールダム、あるいは「大マンチェスター」での林立した工場群が実は「廃墟」!! であることを見せつけられたとき、戦前における日英綿業の角逐を想起し、暫し感慨に耽ったのであるが、同時に「日英の都市形成」の相違性もあるように考えられたのである（たとえば、戦前・戦後における岡谷市の製糸業から精密機械工業への転換も想起されたい）。かゝる論点は、つまるところ両「資本主義の歴史的性格」の相違に帰着するのであろうが、比喩的にいうならば「アーウェル河にかゝる橋は、涙の橋である」（A. Briggs: Victorian Cities, pelican book, 1968, p. 90）と云われるとき、換言するならばまさに、イギリス資本主義、否近代社会の波頭に立ったランカシャー綿業の中心地、マンチェスターとザルフォードを結ぶ、この煤けた橋こそが「涙の橋」であった背後には、資本＝賃労働関係の矛盾が隠されていたというのは、皮相な「読みこみ」であろうか。（1979.9.4. 成稿）

（古今書院、昭和52年12月刊、215頁＋V頁）